［地域総研紀要　14巻１号, P71－84（2016）（研究ノート）］

＜研究動向＞『長い旅路』のはじまり*
―ロシア・コミ共和国におけるソローキン研究動向を中心に―

吉　野　浩　司**

The beginning of *Long Journey* :The New Trends of Sorokin Study in 'Reserch Center for Pitirim A. Sorokin's Heritage' in Russia'

Koji YOSHINO**

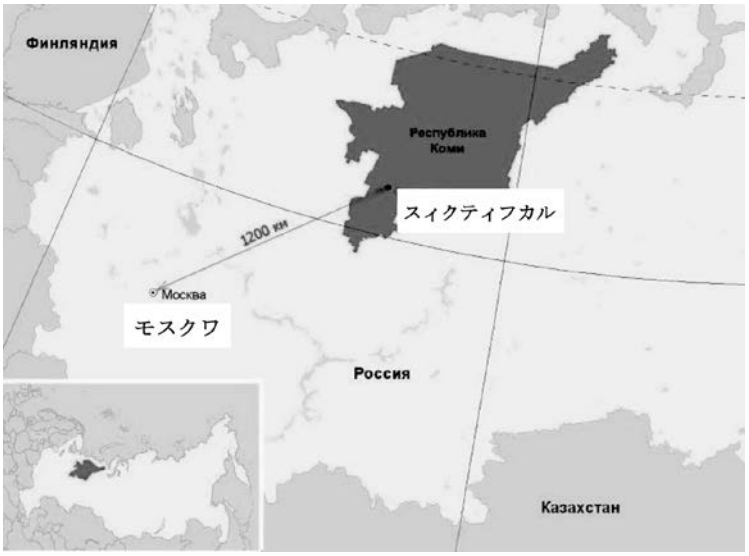
１．はじめに

この研究ノートは、ピティリム・アレクサンドロヴィチ・ソローキン（Pitirim Alexandrowitsch Sorokin = Питирим Александрович Сорокин, 1889年－1968年）の研究動向を、とくにロシアでの現地調査の結果に焦点を絞り報告するものである。

ソローキンは、20世紀の著名な社会学者であり文明論者であった。亡命国アメリカでの多彩な業績については、多くの研究書があり、かなりのところまで明らかとなっている。比較的新しい業績としては、ジョンストンによる『ソローキン―知的伝記』(Barry V. Johnston. *Pitirim A. Sorokin: an Intellectual Biography,* Lawrence, Kansas: University Press of Kansas, 1995)が、その代表的な例であろう。しかしソローキンは、その生涯の半分、すなわち30代前半までを、故国ロシアで過ごしたという事実を忘れてはならない。彼にはロシア語による大著も複数あるほか、論文・雑誌記事ともなると、それこそ汗牛充棟の感さえある。日本はもちろん、アメリカでの研究動向を見ても、このロシアにおける業績を丹念にたどった研究は、皆無であると断言してもよい。

しかし喜ぶべきことに、ロシアでは2000年代以降、急速にソローキン研究がさかんになった。とりわけ、彼の生地であるコミ共和国（Республика Коми）にある研究所ならびにスィクティフカル大学での研究熱は、ロシア国内のどの地域よりも、高いといえるだろう。それらには、彼が生まれてからサンクトペテルブルクの大学へと移るまでにあたる、初期ソローキンを研究しようとする者にとっては、かなりの追い風となっている。実際、いままで未開であった研究領域を埋めるような研究が、次々とあらわれている。それらの研究動向をフォローしておくことは、ソローキン研究に携わるものにとって有意義なものとなろう[1]。

そこで筆者は、その手始めとして、ロシアにおけるソローキン研究の中心地ともいうべきコミ共和国に赴き、最新の研究動向を文字通り肌で感じるべく、調査旅行を敢行した。コミ共和国とはいっても、日本ではなじみが薄いかもしれない。



ここはロシア北部に位置する共和国で、首都はスィクティフカル（Сыктывкар）である。もともと少数民族であるコミ族が住んでいた土地柄である。現代でこそロシア語が共通語となってはいるが、かつてはコミ語という独自の言語を有する、独立した文化圏を形成していたところである。ソローキンの母親は、コミ族の出身であった。ソローキン自身、初めて学んだ外国語はロシア語であるという。そのことからもわかるとおり、彼の幼少期から青年期にかけての思想を形成するまでには、コミ語ならびにコミ文化からの影響が大きかった。

* Received January 6, 2016
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

本研究ノートの構成を記しておこう。最初に、調査の報告に先立ち、かれの自伝の一節を訳出しておいた。幼少期の記憶をたよりに綴ったプロローグは、ソローキンの原風景を知る手掛かりとして、格好の素材を提供すると考えられるからである。その上で、調査旅行の報告に移る。まずは日程と調査地、次いでモスクワで行った若手ソローキン研究者との対話の記録、さらに今回の調査の主要目的であった、コミ共和国のソローキン研究所でのラウンドテーブルの記録、コミ民族博物館ならびに生家博物館での聞き取り調査について、順次紹介していきたい。ソローキン研究所から提供された、ソローキン関連著作の簡単な紹介も間にはさみ、筆者自身の今後の研究の課題を述べることで、本研究ノートのまとめとしたい。

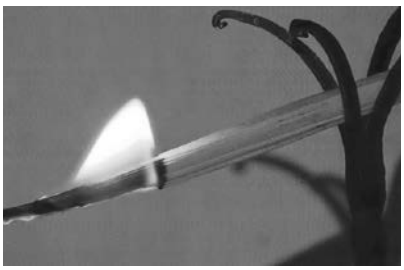
2．「長い旅路」のはじまり

ソローキンは晩年、自らの生涯を振り返った自伝に、『長い旅路（*Long Journey*）』という表題を付けた。北ロシアの寒村で生まれ、聖像職人の父について地方の教会を回り、長じてはペテルブルク大学に学んだ。ロシア革命後はチェコを経て、アメリカへと亡命する。世界的な社会学者としての地位を得てからは、世界各地の国際的な学会に招かれた。そうしたソローキンの長い旅は、生家での母の死から始まる。

［翻訳］ソローキン『長い旅路』のプロローグ[2]

最初の記憶

冬の夜。農民の家屋では、乾いた白樺の木片が燃やされ、薄暗く灯っている。部屋は煙と揺らめく影で満たされている。木片の燃え滓を取り換えるのが私の役目である。



〔ルチカ（полати）は照明に用いられた燭台。〕

外は吹雪いている。室内では、床の上で母が横たわっている。彼女はぴくりともせず、妙に静かである。そのそばで、兄と農民の女性が、せわしく働いている。父は他の村で仕事を探すために、外出している。私は何が起こったのか、はっきりとはわからない。しかし何かが崩壊し、取り返しがつかなくなったことを感じた。ちょっと前に感じていた寒さ、ひもじさは、もはやない。しかし突然、血の気、孤独感、そして喪失感がわきあがってきた。吹き荒れる嵐、過ぎ去る影、兄が発した「死」、「死んだ」という言葉、農民の女性の「かわいそう、かわいそうな孤児」というつぶやき、それらが私の悲しみを深くした。父がいてくれたらいいのだが、彼はいない。いつ帰るのかも私たちは知らない。

次に思い出すのは、村の教会での葬儀のこと。母が棺に横たえられたそばで、ろうそくを手にした父、兄、そして村人らは静かに立ち、司祭、助祭、そして祈祷師は葬儀の祈りをささげ、最後の儀式を執り行う。言葉はわからないが、「ちりはちりに」〔『旧約聖書』「創世記」３：19〕と土を一握り棺に投げ入れる司祭のしぐさは、私の記憶に刻印されている。

〔左上、階段の上にポラチ（полати）がある。かまどの付近にロフト式に設置された、子ども専用の寝台のこと。〕

葬式の儀は終わり、墓地に運ぶため、棺はそりの上に置かれた。兄と私は、棺の前に立った。父、司祭、そして村人たちは、そりの後を歩く。凍てついた、青く晴れわたった空の下、雪が輝きを放っている。どうしたわけだか、兄と私は、しばらくする

[1] 訪問に先立って参照したのが、大野道邦氏とコルネーエヴァ・スヴェトラーナ氏による『ソローキン再訪―文化社会学の可能性』(書肆クラルテ、2014年刊) である。すでに両氏はロシアにおけるソローキンの足跡をたどる調査を済ませており、本書にもその成果が盛り込まれていた。海外のソローキン研究でも稀なロシア時代の足取りを追った記録や、関連記事の翻訳がたいへん刺激となった。後述するクロトフ氏の連絡先も大野氏に紹介していただいた。

[2] ソローキンの自伝としては、晩年のP. A. Sorokin, 1963, *A Long Journey: The Autobiography of Pitirim A. Sorokin,* Rowman & Littlefield がある。本書の第一部、わけても巻頭に掲げられたエピローグから、コミ族の暮らしの一端を垣間見ることができる。

と、棺から飛び降り、家に向かって歩いた。家に着くと、私たちは「ポラチ」（ロシア北部の農民宅にあるロフト式寝床）に登って、横になった。私たちは、おしだまっていた・・・。

＊ ＊ ＊

これが私の最初の記憶である。その時、３歳[3]ぐらいだったろう。この死の場面よりも前に、私の人生で覚えていることは、何ひとつない。

この自伝『長い旅路』のプロローグに情景描写されている、極寒の北ロシアへの調査旅行は、2014年12月30日から2015年１月7日の日程でなされた。日本からの距離の目安となろうから、目的地スィクティフカル空港までの経路と所要時間を記しておきたい。成田空港からモスクワモジェドヴォ（Домодедово）国際空港までは、直行便で約10時間かかる。さらにスィクティフカル空港まで行くには、モスクワのもう１つの空港シェレメーチエヴォ（Шереметьево）国際空港にまで移動し、約１時間半をかけてようやく到着する。この国内線で利用した航空会社は、ノルダヴィア（Нордавиа）航空であった。

訪問先とその日程は、以下の通りである。

2014年12月31日（出発）
成田国際空港10：45→15：00ドモジェドヴォ国際空港
2015年１月２日
若手研究者ドルゴフ氏との対話（第３章）
2015年1月3日
シェレメーチエヴォ国際空港19：20→21：00スィクティフカル空港
2015年１月４日
コミ民族資料館（第４章）
ソローキン研究所（第４章）
スィクティフカル大学・歴史博物館
2015年１月５日
ソローキン生家博物館（第６章）
2015年１月６日
スィクティフカル空港８：20→10：15シェレメーチエヴォ国際空港
2015年１月７日（帰国）
ドモジェドヴォ国際空港17：00→成田国際空港08：35

訪露に先立ち、パヴェル・クロトフ（Павел Кротов）氏に連絡を入れた。クロトフ氏は、元スティフティカル大学教授で、現在アメリカのソローキン財団のディレクターを務めておられる。ロシアにおけるソローキン研究の中心人物の一人と考えてよい。クロトフ氏に日程を伝えると、すぐさまスィクティフカルの関連各所に連絡を入れ、調査旅行の便宜を図ってくれた。上記のスケジュールも、筆者の希望を汲んで、クロトフ氏がアレンジしてくれたものである。

現地では手厚くもてなしていただいた。2015年１月３日夜、スィクティフカル空港に降り立つと、スィクティフカル大学のヴラジミール・アレクサンドロヴィチ・スリーモフ（Владимир Александрович Сулимов）教授と、コミ科学センター言語・文学・歴史研究所のバレリー・エンゲリソヴィチ・シャラポフ（Валерий Энгельсович Шарапов）研究員が出迎えてくれ、ホテルまで送り、翌日からの受け入れ態勢を説明していただいた。翌１月４日は、朝から夕刻まで、３カ所の博物館や研究所を回ってもらう。これについては、本稿の第４章、第８章で述べることにする。以下では、そのコミ共和国への国内移動に先立ってなされた、モスクワの若手研究者ドルゴフ氏との対話内容を紹介しておきたい。

３．若手研究者アレクサンドル・ユリエヴィチ・ドルゴフ氏との対話

2015年１月２日、調査初日の目的は、モスクワで若手研究者アレクサンドル・ユリエヴィチ・ドルゴフ（Александр Юрьевич Долгов）と対話することであった。彼は当時、ロシア科学アカデミー社会科学情報科学研究所に設置された、社会学・社会心理学大学院の博士課程に在学する大学院生であった。主としてソローキンの学説を研究している若手社会学者で、2015年２月に迫った博士論文の提出を控え、さらに６月の論文審査にむけて、準備をされている時期であった。上記クロトフ氏の教え子ということもあり、ロシア国内のソローキン関係の会議などでは、スタッフをされる

[3] 実際にはソローキンの母親の死は1894年春であるから、５歳ということになる。

など、ロシアの研究動向に詳しい若い研究者の１人である。現在、ソローキン関係の情報を、最も整理して扱っているソローキン財団のHP（http://pitirim.org）の管理人もしている。ここに、ドルゴフ氏との対話の内容を記録しておきたい。当日１時～３時半までの約２時間半、いろいろな話を聞かせてもらった。その中で特記すべきことのみ摘要すると、あらまし以下のようになる。

まず、ドルゴフ氏自身もコミ族の両親を持ち、学部までをスィクティフカルで過ごしたという。ソローキンと同郷の生まれであることから、理論的なことだけではなく、感情の奥深いところでも共感するものがあるのかもしれない。そこで、コミ共和国ならびにコミ族に関することを立ち入って質問してみた。彼自身もコミ語を解さないとのことだが、彼に限らず現在では、コミ出身者でもコミ語を話せる若者は極めてまれだという。またコミ族は、伝統的に狩猟と漁業を生業としてきており、今でも川魚を主食として生活しているということである。現在、コミの自然・民俗が、ロシア全土に紹介されつつあるという。というのもロシア政府は、現在、国を挙げたツーリズムを推進しており、その対象としてコミ族の生活圏も入っているからだというのが、ドルゴフ氏が考える理由であった。

またコミ共和国は雪国なので、著名なスキー選手やスケート選手を多数輩出しているとのこと。英語以外の外国語としては、ドイツ語が好んで学ばれていること。その理由は、オーストリアとの経済的結びつきが強いからで、特に製紙会社が外資系企業（Монди Сыктывкарский ЛПК）として有名だから。といったことを知ることができた。

またドルゴフ氏に、ロシアのソローキン研究の現状についても聞いてみた。彼によると、ロシアにおけるソローキン研究の牽引者は、歴史家でロシアナショナル科学アカデミー（Российская академия наук）会員でもあるサポフ（Вадим Вениаминович Сапов, 1951-）氏であるという。彼はソローキンに関する研究書を編集・刊行している。

さらに今回の調査旅行の目的である、コミ共和国、スィクティフカル大学、ソローキン研究所が共同で推進している、ソローキンを顕彰する動きについても率直な意見を伺った。意外なことに、彼の回答によると、今のプロジェクトがこのまま継続していくかどうかは不確定であるということであった。特に一大プロジェクトとなっている、アメリカのハーバード大学図書館とカナダのサスカチュワン大学図書館に所蔵されているソローキン文庫とを統合して、スィクティフカル大学に移すという計画については、不確定要素が多いということであった。アーカイブの統合はソローキンの息子であるセルゲイ・ソローキン氏に承認を取り次ぐところまでは進展している。しかしこの先どのような形で実現していくのかについては未定であるとのことであった。もちろん資金面でも大きな困難がある。

筆者自身も、ソローキン研究者の１人として、文書が分散していることは好ましくないと考えている。アーカイブを一本化するには、おそらく国家その他の機関からの支援を受けなければならない。だがアーカイブの統合という偉業を実現できるのは、ロシアおよびスィクティフカル共和国の支援を受けたスィクティフカル大学をおいて他にないだろう。対談の終わりに、彼からソローキンの書簡集『戦争から平和へ―Ｐ．ソローキンの創造的利他主義理論の起源について』[4] を頂いた。これは指導教官であるクロトフ氏とともに、ドルゴフ氏が編訳された著作である。

最後に、ドルゴフ氏の博士論文についても、簡単に触れておこう。論文のタイトルは「ピティリム・ソローキンの創造的利他主義理論―起源と方法論の問題（Теория созидательного альтруизма Питирима Сорокина: генезис и методологические проблемы）」である。

第一部では、これまで明らかとされてこなかった初期のソローキンの足跡をふまえた、ソローキンの生涯の略伝について述べている。

第二部では、利他主義に傾いたソローキンの晩年の理論的著作について読解している。

第三部では、現代における利他主義の意義として、３つのことを述べている。まず人間の連帯と社会の統合のための研究と実践が必要であるこ

[4] Кротов П.П., Долгов А.Ю. *От войны к миру: у истоков теории созидательного альтруизма Питирима Сорокина.* Сыктывкар, Вологда: Древности Севера, 2011. – 400 с.

と。次に利他主義ならびに統合主義による社会科学を再編しなければならないこと。そして、最後に、現代の社会的、心理的な諸科学による利他主義研究動向を述べて結びとしている。

2016年３月現在、ドルゴフ氏の博士論文は、無事、審査を通り、博士号を取得している。現在、ロシア科学アカデミー社会科学情報科学研究所（ИНИОН РАН）で研究員として勤務している。

４．スィクティフカルでの調査

コミ共和国国立博物館

１月４日、午前中に訪れたのは、コミ共和国国立博物館（Национальный музей Республики Коми）である。学芸員に解説をしてもらいながら、館内の展示物を見てまわった。ここで説明されているのは、かつてのコミ族の暮らし、習俗であることはいうまでもない。

博物館の中ほどに、ややサイズを縮小した形で展示されていた、コミ族の伝統家屋があった。この伝統家屋の中に入ると、伝記のプロローグの情景が思い出された。ログハウスのような木造丸太造りの重厚感のある家である。部屋が７つほどあるが、夏と冬で、使う部屋が違うのだという（信仰による説明もあるが、夏冬の気候差に適応するためという目的もあるようだ）。コミ族は、三層の宇宙観（天と地とその間）を持っており、それは家づくりにも反映されている。東西南北を意識したものとなっている。東はキリスト教の神棚があり、男の領域だとされる。西はかまどが設置され、女の領域だとされる。さらに北は入口で浄を、南は物置、出口で不浄を表している。こうした家屋は末子に相続され、他の兄弟は、成人すると家を出て、自分の家を建てなければならない。とくにロケーションは重要である。不幸のあった家、殺人や火事があった家は、家屋の利用が避けられるのはもちろん、その跡地に家を建てることも憚られている。また建材として、二股に分かれたような材木は使ってはいけない。主人が二人いることを暗示するからだという。

伝統的なコミ族の生業は、半農半猟であり、さらに漁も行っている。昔から法意識が強く、ドアの鍵は掛けなくても泥棒が入ることはなかった。それどころか、森林に作られた小屋などは、旅人など、いつだれが使ってもいいとされていた。これらは、他人を思いやる相互扶助の精神に恵まれている、コミ族の性格の１つを表しているのだという（これについては、第５章で紹介する、ソローキンの論文「現代のジリヤン」でも触れられている）。

村の男女ないし男同士は、幼いころより、二人一組で、社会活動（ボランティア）を行うことになっている。また女性は土器を３つ作る。１つはお金、２つめは衣類、３つめは男性を示すシンボルとなっている。結婚は男性が決め、女性は拒めない（むろん現代では、そのようなことはない）。だいたい22歳ごろに結婚するのだという。熊は身近な生き物で、人の言葉を解するとされる。結婚式には熊の皮をかぶった祈祷師が現れる。あひるも重要な世界創出のシンボルとなっている。創造者たる親アヒルが２つの卵を産んだ。１つは善のアヒル、１つは悪アヒルとなったと言われている。

年中行事としては、１月にあそびの会がある。２月にはマースレニッツア祭、８月には夏の終わり、冬の始まりを告げる祭りがある。酒はスールがある（これはサンスクリット語からの借用で、印欧語族との交流があったとされる）。

以上が、この博物館で、展示物を見ながら受けたレクチャーの内容である。ここで強調されていたのは、コミ族には、自主自立、正義、そして相互扶助の精神が強いということである。このことは、後年ソローキンが社会学から、倫理学の方へと立ち位置をずらし、利他主義を提唱するようになったことを考え合わせると、興味深い指摘であった。またコミ族の三層構造からなる統合的な宇宙観も、ソローキン社会学の基礎を作っている統合主義哲学との共通点があった。これらを掘り下げると、彼の社会学の根源を突き止めることができるように思われた。

ソローキン研究所

１月４日の午後に訪問したのは、ソローキン研究所である。正式名称は、「ソローキン＜遺産＞

センター（Центр "Наследие" имени Питирима Сорокина）」という。2010年にオープンした同センターは、ソローキンの学問と思想の普及に努める政府の支援団体である。とりわけ教育・出版事業が、主な仕事である。教育活動としては、小学校から高校・大学までの学生を対象とする、講演活動などを行っている。現所長は、クジヴァノーヴァ・オリガ・ユリエヴナ（Кузиванова Ольга Юрьевна）氏である。わざわざ日本からやって来たソローキン研究者のためにと、ラウンドテーブルを開催していただいた。年始にもかかわらず、５名の研究者と１名の通訳者[5]を交えた討論がなされた。

ソローキン研究所所長
　クジヴァノーヴァ・オリガ・ユリエヴナ(Кузиванова Ольга Юрьевна)
スィクティフカル大学文化芸術学部・教授
　ヴラジミール・アレクサンドロヴィチ・スリーモフ(Владимир Александрович Сулимов)
スィクティフカル大学文献学部文化学科学科長
　ファデーヴァ・イリーナ・エヴゲニヴナ（Фадеева Ирина Евгеньевна）
コミ科学センター言語・文学・歴史研究所・研究員
　バレリー・エンゲリソヴィチ・シャラポフ(Валерий Энгельсович Шарапов)
ニコライ氏（研究所のスタッフの一人）

写真　左よりユリエヴナ所長、筆者、スリーモフ教授、エヴゲニヴナ教授、ニコライ氏（2015年１月４日ソローキン研究所にて）

まず筆者がセンターの仕事内容などを質問したところ、いくつかのトピックが持ち上がり、議論となった。そこで出てきた情報ならびに意見をまとめておくと、以下のようになる。

コミ族出身の著名な学者・知識人としては、ソローキンの他に、ジャコフ（Каллистрат Фалалеевич Жаков, 1866-1926）、ネリモフ（Василий Васильевич Налимов, 1910-1997）がいる[6]。このうち初期のソローキンにとってジャコフは恩師と呼べる存在で、公私ともにソローキンを支援した。

スリーモフ教授が１つの意見として、ソローキンのバックボーンとしては、コミ文化ならびに師ジャコフの存在、そしてロシア正教であると発言された。するとエヴゲニヴナ氏はこれに反論し、ロシア正教ではなく、もっと広い意味での宗教哲学であるとの指摘をされた。確かにソローキンの父は、ロシア正教会のイコンの制作・修理に関わる仕事をしており、ソローキン自身も父の仕事を手伝ったりしていたが、キリスト教という枠では捉えきれないところもある。

筆者は恩師ジャコフについては、コミ科学センターのシャラポフ氏から詳しい説明を受けた。ジャコフは人類学者で、出自であるコミ族のフォークロアを調査したこと。またコミ語には日本語と似ているところもあって、1902年ないし1905年ごろ日本に来たことがあるのだという。しかし、ソローキンの後期の作品には、ほとんどジャコフの名前は現れない。そのことを、筆者は疑問に思い、彼に聞いてみた。すると1917年の革命後はウクライナに逃れ、秘密結社を作ったという。それにより彼の晩年は、カルトの指導者のような扱いを受けるようになった。ソローキンの心が離れていった原因は、そこにあるのだろうというのが、シャラポフ氏の意見である。

また、エヴゲニヴナ氏の口から、ソローキンのシンボリズム（Символизм）は、ジャコフの限界主義（Лимитизм）に由来するといいうことが語られた。２人は、同じコスミズム（космизм）を共有しているのだという。そしてそれは、ジリヤン（зырян、コミ族の旧称）のコスミズムなのである、というのがエヴゲニヴナ氏の主張であった。コスミズムが何かを正確には把握できなかっ

[5] ラウンドテーブルは英語によってなされたが、議論が白熱した際には、早口のロシア語が飛び交ったため、通訳者に助けられた。
[6] ソローキンはコミ族の母、ロシア人の父のハーフである。
[7] ロシアのコスミズムは容易に理解することは難しいが、スヴェトラーナ・セミョーノヴァ他著『ロシアの宇宙精神』(1997年刊、せりか書房）がその理解の手掛かりとなる。本書の原題は、「ロシア・コスミズム」となっている。

たが、研究所に来るまえに博物館でも説明された、三層構造の宇宙観（世界観）のようなものかと想像した。[7] またソローキンのシンボリズムは、アレクサンドル・ブロークのシンボリズムとも類似性を指摘できるのだという。アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ブローク（Алекса́ндр Алекса́ндрович Блок, 1880-1921）は、ロシア象徴主義を代表する作家であり、20世紀で最も重要な詩人の一人とも評されている。眼前に繰り広げられる現実世界を、より長期の歴史の転換点としてとらえうる視点を持ち、それを詩に結晶させる、という作風をブロークは持っていた。同じような現象を、ソローキンは、詩や芸術作品としてではなく、社会学的著作として生み出した、というような意味であろうか。

さらに話題は、ソローキンの晩年の利他主義研究にまで及んだ。ソローキン研究所で感じたことの１つは、現在のソローキン研究は、晩年の利他主義研究に集中しているように思われる、ということである。それは時代の要請ともいえるだろうか。筆者は、なぜソローキンは晩年に利他主義研究へと向かっていったのかを質問してみた。ロシアが革命や飢餓を経たことが、１つの理由ではないかという回答であった。ソローキン自身、1921年に発生したサマラ（Самара）・サラトフ（Саратов）の飢饉調査を行ったが、晩年までその記憶は忘れることはなかった。戦争や革命、そして飢饉というような極限状況を経験した人間は、精神的な何ものか（душа）を探求するようになる。その精神とは、同時代のフロイトが行った深層意識とは別のものである。もっと高次の意識、それを探求するような仕方で、ソローキンは精神なるものを探し求めた。それは未完のプロジェクトであったのかもしれない。その高次の精神を利他主義研究によって探求すること。ソローキンが今日のわれわれに投げかけている課題とは、そのことではないだろうか。これが、この日のランドテーブルで行われた議論の総括であった。

ミーティングの後、研究所のもう１つの大きな事業である出版事業についても紹介してもらった。これまで、いくつかの著作・冊子が刊行されている。それらを献本していただいたので、内容を簡単に紹介しておくことにしたい。

①コミ語訳『長い旅―ソローキン自伝』（*Кузь туй вуджӧм*）

ソローキンが晩年に出した自伝を、彼の母語であるコミ語に訳したもの。特に幼少期の記述を、少数言語のコミ語で読めるようになったことの意義は大きい。

Питирим Александрович Сорокин, *Кузь туй вуджӧм: Олантуй йылысь роман:* комиӧдӧма английскӧйысь / Центр "Наследие" им. П. Сорокина; В.А. Черных, Г.В. Федюнёва, О.И. Уляшев (пер. с англ.на коми); Под общ.ред. В.П. Маркова, А.К. Конюхова.- Сыктывкар, 2013.- 355 с.

②『ピティリム・ソローキン―主張とアフォリズム（*Питирим Сорокин: суждения и афоризмы*）』

ソローキンの様々な著作の中から、選りすぐりの一節を抜き出した、アンソロジー形式の著作で、研究者にとってはもちろんのこと、これまでソローキンに親しんでこなかった人たちにとっても、大変便利な本である。編者はヴラジミール・テレビーヒン（Владимир Теребихин）。

Питирим Сорокин : суждения и афоризмы / Авт. -сост. В.М. Теребихин; Предисловие В.А. Сулимова; Центр "Наследие" имени Питирима Сорокина.- Сыктывкар:Анбур, 2013.- 271 с.- Библиогр.: с.264-271

③『ピティリム・ソローキン―彼の人生と思想的遺産』

子ども向けに配布する目的で書かれたソローキン略伝。55ページの小冊子。

Питирим Александрович Сорокин: жизненный путь и идейное наследие / "Наследие", центр им. П. Сорокина (Сыктывкар). - Сыктывкар : Центр "Наследие", 2013. - 55 с.

写真 左より、1. 自伝のコミ語訳、2.『ピティリム･ソローキン―主張とアフォリズム』、3.『ピティリム・ソローキン―彼の人生と思想的遺産』

出版物の刊行はまた、ジャーナルの出版にも及んでいる。2012年から年二回（７月と12月）の定期刊行物として、ソローキン専門雑誌「遺産（наследие）」を出している。そして目下の、研究

所最大のプロジェクトは、なんといっても現在進行中の、全集の完成であろう。以下それを紹介したい。

５．ソローキン全集（ロシア語版）の計画

現在にいたるまで、ソローキンの全集は、社会学者としてのキャリアの長いアメリカでも刊行されていない。ロシアでは翻訳書や研究書は出されているものの、全集の話はあがってこなかった。しかし、ここ数年で、事情は変わりつつある。現在、ソローキン研究所では、2018年をめどに、全集が刊行されている。この完成年度は、没後50年に当あたる。予定では、全30巻になる。うち2016年１月の時点で、３冊が刊行されている。その内容目録を見ると、以下のとおりである。

第１～２巻　「初期論文集」(1909年～1914年)
※既刊（2014年）
Том 1-2. Ранние сочинения: 1910-1914 гг.
第３巻　『罪と厳罰―犠牲と報酬』(1913年)
※既刊（2015年）
Том 3. Преступление и кара, подвиг и награда. 1913 г.
第４～５巻　「論文と批評」(1915年～1922年)
Том 4-5. Статьи и рецензии 1915-1922 гг.
第６～７巻　『社会学体系』(1920年)
Том 6-7. Система социологии.
第８巻　『法の一般理論の初等教科書』(1919)、『公共社会学教本』(1920)、『社会教育と政治に関する論説』(1923)
Том 8. Элементарный учебник общей теории права. 1919 г.
Общедоступный учебник социологии. 1920 г.
Популярные очерки социальной педагогики и политики. 1923 г.
第９巻　『要因としての飢餓』(1922年)　※既刊（2014年刊）
Том 9. Голод как фактор.
第10巻　「芸術作品」
Том 10.　Художественные произведения.
第11巻　『ロシア日記からの数ページ』(1924年)
Том 11. Листки из русского дневника. 1924 г.
第12巻　『革命の社会学』(1925年)
Том 12. Социология революции. 1925 г.
第13巻　『社会移動』(1927年)
Том 13. Социальная мобильность. 1927 г.
第14巻　『現代社会学理論』(1928年)
Том 14. Современные социологические теории. 1928 г.
第15巻　『農村と都市の社会学原理』(1929年)
Том 15. Принципы сельской и городской социологии. 1929 г.
第16巻　「論文」(1929年～1937年)
Том 16. Статьи 1929-1937 гг.
第17～18巻　『社会文化的動学』(1937 - 1941年)
Том 17-20. Социальная и культурная динамика. 1937-1941 гг.
第21巻　『私たちの時代の危機』(1941)、『SOS－私たちの危機の意味』(1951年)
Том 21. Кризис нашего времени. 1941 г. SOS: Смысл нашего кризиса. 1951 г.
第21巻　『災害に際しての人間と社会』(1942年)
Том 22. Человек и общество в условиях бедствий. 1942 г.
第23巻　『社会的因果、空間、時間』(1943年)、『ロシアとアメリカ』(1947年)
Том 23. Социальная причинность, пространство, время. 1943 г. Россия и Соединенные Штаты. 1944 г.
第24巻　『社会・文化・パーソナリティ』
Том 24. Общество, культура и личность. 1947 г.
第25巻　『危機の時代の社会哲学』(1950年)、「社会学理論の現在」、『現代社会学の病癖と弱点』(1956年)、
Том 25. Социальные философии в век кризиса. 1950 г.
Социологические теории современности.
Причуды и недостатки современной социологии. 1956 г.
第26巻　『愛の方法と力』(1954年)
Том 26. Пути и могущество любви. 1954 г.
第27巻　『アメリカ性革命』(1956年)、『権力とモラル』(1959年)、「政治とモラルに関する論文」
Том 27. Американская сексуальная революция. 1956 г.
Власть и нравственность. 1959 г.
Статьи по проблемам политики и нравственности.
第28巻　『長い旅路』(1963年)、「自伝的論文と資料」
Том 28. Дальняя дорога. 1963 г. Автобиографические статьи и материалы.
第29巻　「未発表作品」

Том 29. Неизданные произведения.
第30巻　「書簡の遺産」
Том 30. Из эпистолярного наследия.
第31巻　『社会文化的動学・縮刷版全一巻』
Том 31. Социальная и культурная динамика (дополнительное однотом-ное издание).

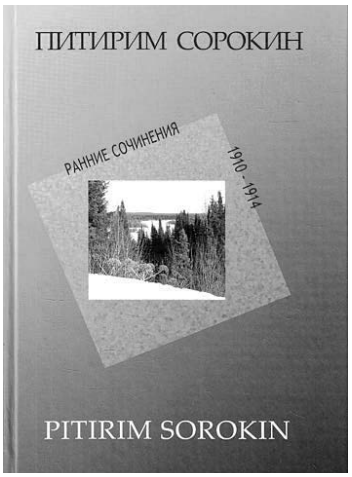
ソローキンが亡命するのは、1922年のことである。それ以降の著作は、ほぼ英語によって書かれている。したがって上記リストの第11巻以下の著作は、英語からロシア語に翻訳されたものであるといってよい。この全集のうち、2015まで年に、最初の３巻が出版された。それが第１～２巻（合冊）、第３巻、そして第９巻である。いずれの巻頭にも、第３章でふれた、編者サポフ氏による解題が書かれている。これはロシア政府の「ロシアの国家の団結を強化とロシア人の民族文化の発展（2014－2020年）」[8]という支援事業を利用して刊行されているものである。

とりわけ注目すべき著作は、『初期論文集―1909年－1914年』と題された、第１～２巻（合本）である。これまで入手困難であった、初期ソローキンの作品を収録している点で、貴重な仕事であるといえる。本書には、コミ文化に関する民族誌的研究など、ジャコフの影響下に書かれた論文が、多数収録されている。民族誌的観点からも貴重な知見が盛り込まれていると思われるが、何より、社会学を始める前後のソローキンの問題意識をさぐる上で、興味が尽きない論文集となっている。次節では、これを取り上げて、説明を加えることにしたい。

ソローキン『初期論文集』

初期ソローキンの研究を行おうとする場合の基本的な文献になるのが、予定では第１－２巻となっていた著作『初期論文集―1910－1914年』である。

本書は、30編あまりの初期の社会学的著作の集成である。主に、雑誌記事や書評などをあつめたものである。大半が、1914年前後に発表されたもので、ロシア内外でも、見られることの少なかった貴重な文献も含まれている。ソローキンが最初の書物を発表する前の小作品群であり、初期のソローキンの考えを知るうえでも重要なものである。20世紀初頭の社会学者ソローキンに関心のあるものだけではなく、ロシアの社会思想史を研究するもの、さらにはコミ族の暮らしと文化に関心のあるものにとっても、興味の尽きない論稿が多数収録されている。以下、いくつかの論考のタイトルを挙げておく。



「ジリヤンの家族と結婚の進歩について（К вопросу об эволюции семьи и брака у зырян）」
「現代ジリヤン（Современные зыряне）」
「ペチョラとジリヤンの植民地遠征（Печорская экспедиция и колонизация зырянского края）」
「現代社会学における主な進歩理論（Главнейшие теории прогресса в современной социологии）」
「発展と進歩について（К вопросу об эволюции и прогрессе）」

この時期を特徴づけるキーワードを上げるとするなら、「ジリヤン」ならびに「進歩」ということになるだろう。このうち、最もまとまりのある論文「現代ジリヤン」を意訳し、簡単に紹介しておくことにしたい。第４章でも触れたように、ジリヤンとは、コミ族の古い呼称である。

［要約］「現代ジリヤン」（1914）

ジリヤンは私たちの身近なところで暮らしているとはいえ、彼らについては、ほとんど知るところはない。通常、ジリヤンに対する一般認識といえば、遅れているとか、半野生的、あるいは野蛮人であるといったものであろう。一般向けの書物では、どれも大差はない。これらの本の著者の中には、まれに貴重な報告をするものもあるが、概してそのようなことはない。

[8] Укрепление единства российской нации и этнокультурное развитие народов России (2014-2020 годы)

ジリヤンの生活に触れて、例外的な文化を有しているなどといった作り話の類が教科書に記載され、国中に行き渡っている。ソローキンは、こういったジリヤンに関する偏見に対して、反論を行った。ジリヤンは、ドイツ人、ユダヤ人に次ぐ、第三の国民（третий народ）だというのが、その主張である。ジリヤンの現実とは、どのようなものか。それを、客観的に記述することが、「現代ジリヤン」を書いた目的である、とソローキンは記している。

第１章　地理的境界とジリヤン人口（Географические границы и число зырян）
第２章　ジリヤンの居住地と住まい（Поселение и жилище зырян）
第３章　家屋（Жилище）
第４章　ジリヤンの服装、食器、装飾（Одежда, утварь и украшения зырян）
第５章　食べ物（Пища）
第６章　ジリヤンの職業と工芸（Занятия и промыслы зырян）
第７章　家族と社会関係（Семейные и общественные отношения）
第８章　宗教的信念やカルト（Религиозные верования и культ）
第９章　ジリヤンの識字および結論（Грамотность зырян и заключение）

学校の他、医療施設はかなり充実している。各村に診療所もあれば、助産師もいる。大きな村や農村には病院もある。同じく獣医とその助手、そして獣医のための施設もある。かつては「魔女（колдунов）」や「魔術師（знахарей）」を補助する役目をしていたのであろうが、現在は、病院に対する恐れもなくなっている。ジリヤンの健康については、森林の人々は、一般に優れていた。ジリヤンは一般に背が高く屈強な体躯の持ち主である。ヴィチェクダ、シソラ、ペチョラで人類学的測定を行ったジャコフの資料からもうかがえる。さらに読書や学習をよくし、とくに「実践」的なことを好む。「北のアメリカ人」、「北のユダヤ人」と呼ばれることもある。ストロガノフ家の時代（18世紀）ごろから記録される。農奴制と抑圧を経験していないので、ジリヤンは独立、自由の気風を持っている。

また平和的、友好的で、かつ正直である。ウドル（Удор）では、今でも家の中に見知らぬ人が入っても、家の所有者は、立ち上がって、テーブルにその見知らぬ人を招待しなければならない。また施錠はしない。ただし家に誰もいないことを示すために「パス（пас）」という棒状の施錠を行う。ヴァシュゴルトの教会の窓には、格子もない。船旅では、河岸にボートや荷物を残したまま、遠い村々を歩いたが、なくなったことはない。こうした温かさ、親しみやすさ、誠実さは、ウドル・ジリヤンには言えるが、残念ながら、他の地域では違う。またジリヤンの人生について様々な文化的観点から調べた結果、自立性ということを見出すことができた。

ジリヤンは「精神的」経済的な危機を体験しつつある。それは狩猟、漁業、林業などのあらゆる活動にわたる。森林は急速に減少しつつあるが、近代的な技術と農地のみで、ジリヤンは生き延びることはできない。この危機的状況を脱するには、農業機械の開発や漁の技術の向上、あるいはその両方がなされなければならない。そのためには、農学の知識を身に着けさせることが望ましい（ゼムストヴォの助けを借りて）。また協同組合による地産地消の推進などによって。またそれを目的とした特別の専門学校を開校する必要がある（貿易学校を除くとそうした学校は存在しない）。進歩、すなわち知識の啓発、それこそが、危機的状況を脱する有効な手立てである。

６．トゥーリヤのソローキン生家博物館

トーリヤまでの道のり

１月５日朝、いよいよトゥーリヤ（Турья）という集落にある、ソローキン生家博物館（Дом-музей им. П.А.Сорокина）への旅を決行することになった。前日のソローキン研究所でのラウンドテーブルの席上、本当に行くかどうかを再確認された。１月の雪深い時期に行くには、首都スティフティカルの人にとっても、覚悟のいる小旅行だということが、それによってわかった。行く前は想像もできなかったことだが、片道180キロの道のりを４時間かけて走破することになった。路面は完全に雪で踏み固められ、そこを時折、轟音をならしながら、除雪車がかなりのスピードで行き来していた。筆者の「絶対に行きたい」という言葉により、その小旅行は実施されることとなった。

朝８時、ホテルのロビーを降りると、スリーモフ氏はすでにソファーに深々と腰を沈めていた。開口一番、「今日は行けるかどうかわからない。昨晩、大雪が降った。危険と判断したら引き返すかもしれない。でも幸いに、今朝はそんなに寒くない。氷点下20度だ。」と言った。

４時間の旅のはじまりである。スィクティフカル大学が準備した公用車の車内では、スリーモフ氏の口から、スィクティフカルに関する情報を聞き出すことができた。ウクタ‐スィクティフカル道路（Дорога Ухта-Сыктывкар）というのが、今日走る道である。途中、ビールの工場、ショッピングモール、そして製紙工場などが見えてきた。製紙工場は、グリンピースから問題を指摘されるほど、環境に悪い施設だそうである。確かに、そこを車で通りすぎるときには、窓を閉めているにも関わらず、激臭が漂ってきた。

走り続けていると１時間もせずに、家並みは閑散となり、やがて森林の中に入った。典型的なタイガ（針葉樹林地帯）である。コミ共和国は一年のうち８か月は雪に覆われる。そうなると、村々は周辺都市と隔絶される。スリーモフ氏は、「森はかつて海だった」、といった。実際に海だったわけではなく、海が島々を隔てているように、森が集落を隔てていることを指して、そう表現したのである。両脇にタイガをながめながら、一直線

の道を通っていくので、車窓からは単調な風景しか見えないのだが、時折、直線の空白地帯が現れてくる。そこには、巨大な送電線の鉄塔が建てられており、各地の村々に電気を供給しているようである。スリーモフ氏は別荘（ダーチャ）を持っており、週に３日はそこに帰るのだという。町に近ければ10,000ドル、これから行くトゥーリヤでは、その半分ぐらいで買えるのではないか、といっていた。

途中でスリーモフ氏は、昨日のミーティングで言い残したかのように、「ソローキンは人間の変容（преобразование）を求めていた」というようなことを語った。これは政治や宗教としてではなく、倫理的、実践的な課題としての「変容」ということであった。晩年の利他主義とは、その文脈で捉えなければならないというのが、スリーモフ氏の意見である。

なぜソローキン関連の事業をコミの市長は推進しているのか。その国家事業はこれからも継続されるのか。この疑問をスリーモフ氏に投げかけてみた。回答としては、おそらく市長が退任したあとも続くであろうとのことであった。とくにコミ共和国には、強制収容所が存在していた（1920年代から50年代にかけて）。近年、その存在が明らかになっており、コミ共和国には、その調査もふくめた、巨額の学術的資金が投入されているとのことである。

ソローキン生家博物館

到着まであと50キロという地点で、ヴィミ（Вымь）川を渡ることになっていた。夏場は車用の渡し船が出ると聞いていたが、冬場は、凍った川の上を、そのまま車で通過するのだという。おかげで車で川を渡るという貴重な経験ができた。

さらにしばらく走ると、丸太造りの家々が見えてきた。昨日、コミ国立博物館で見学させても

らった家と同じ構造である。壁の半分ほどが雪に埋もれていた。たまに雪かきをする光景を見たぐらいで、人はほとんど見かけなかった。その丸太の家の１つが、ソローキン生家博物館であった。

入口は雪かきがなされており、煙突から煙が出ていた。スリーモフ氏の後について、生家の門をくぐると、中でコミ族の民族衣装をまとった女性が歓待してくれた。コミ族のあいさつということで、玄関口で、ハグに似た軽い抱擁を行った。外はマイナス20度とは思えないほど室内は温かい。2005年1月に開館したこの生家博物館には、ソローキンの子息も来たことがあるという。

部屋の構造など、コミ族の暮らしとともに紹介してもらった。昨日、一度教えてもらったことが、さらに生活感のある形で体験できた。例えば貸していただいたトイレは、物置、納屋、出口は南にあり、確かに薄暗いところにあった。

知りたかったのは、上記の自伝にも出てきた、ランプがわりの白樺の小枝を置く燭台ルチナ（лучина）、そして子ども用のロフト式寝台であるポラチ（полати）である。電気が通っている現在、ルチナ（燭台）は使われることはないが、さきほどの物置の中にしまわれている、本物のルチナを確認できた。ポラチも実際に見せてもらったが、意外に天井までの幅がなく、見た目は窮屈であった。子どもの寝床ということで、かまどに併設され、室温が高い天井近くに作られている。ちなみに大人は室内のベッドで寝るとのことである。

部屋の説明を終えると、昼食に通された。川魚を材料に作られたキシュやスープに舌鼓を打った。特に、ラズベリーその他のジャムが気に入って、紅茶に混ぜておかわりさせていただいた。食後には、コミ語で誦する、ソローキンを讃える頌詩を聞かせてもらった。初めてのコミ語の響きに、時間を忘れて聞き入っていた。詠誦を終えると、最後に、今は廃墟となっている復活教会（Церковь Воскресения Господня）を見せてもらうことにした。ソローキンの父親が修理をおこなったイコンもあるというが、膝まである積雪のため、近くに行くことを断念した。そのすぐ近くには、ソローキンの記念碑があったが、これにも近づけなかった。再訪を誓いトゥーリヤを後にした。

７．おわりに

こうして初期ソローキンをめぐるコミ共和国への調査旅行は終わった。このようにロシア極寒の辺鄙な田舎の集落から、なぜ、あのような世界的に著名な学者が生まれ出たのか。この問いは、筆者を含め、ソローキンのいくつかの書物に触れ、彼の業績に思いを馳せたときに、誰もが抱く感懐なのかもしれない。しかし、この問いは、むしろ問いかけた側に投げ返し、再考をせまらなければならない問題を含んでいる、というのがこの調査旅行を終えた筆者の率直な感想である。すなわちそれは、以下のような認識である。確かにソローキンが生まれたのは、北ロシアの片田舎、すなわち近代文化から隔絶された僻村であった。しかし、そうであったればこそ、世界的な学者たりえたとのだ、というのが筆者の今のところの結論である。それは次のような事情による。

文化的なものへのあこがれ、それは文化の中心地から離れれば離れるほど、強く抱かれるものである。ロシアは、ピョートル大帝のペテルブルク建設に象徴されるように、近代西洋文化に対しての強烈なあこがれを、一方において抱きつづけてきた。ペテルブルクや、その後のモスクワの知識人の一部には、西洋文化を完璧に身に付けたものもいた。流暢なフランス語を話し、生活も身のこなしも、全て西洋然とした人たちである。

寒村生まれの青年の目に映るペテルブルクとは、あるいはそこで活躍する知識人とは、どのようなものであったろうか。おそらくは、その洗練された立ち居振る舞いに、憧れと羨望のまなざしを向けたことであろう。しかし、それと同時に、どこからかわいてくる違和感を抱くこともあったのではないか。よそ者の目（第三者の視点）から見たら、結局、ペテルブルクの知識人も、近代西洋の亜流でしかない、という意識がどこかであった。世界的な都市パリの真似をしている田舎街ペテルブルクという構図を、はっきりと見抜くことができたのは、それまで大都会ペテルブルクを仰ぎ見ていた僻村トゥーリヤ出身のソローキンではなかっただろうか。どれだけ近代西洋を真似しようが、それは模倣にすぎない、という意識が心の

どこかでわだかまっていた。

日本において、ソローキンを学ぶことの意義はそのあたりにあると思われる。明治以降、日本は世界の先進的な科学技術や、最新の芸術や思想を吸収してきた。それらは、どれほど自家薬籠中のものとし、使いこなせたとしても、あくまでも借り物でしかない。そのことに気づかせてくれるのが、ソローキンの第三者の視点である。文化の発信者とも追従者とも違う、第三者の立場、これこそが日本においてソローキンを学ぶことの意義である。そのことに気づかされたことが、今回の調査旅行で得られた、ささやかな収穫である。

ソローキンをめぐる「長い旅路」は、この視点から始まることになるだろう。